橋爪 恵子

『パシューラルに於ける物質的想像力』とイメージの伝達の可能性

本発表は、G・パシューラル『八九一九一六』の科学哲学と詩学を、主観的認識とイメージの伝達という観点から論じることを試みる。

パシューラル自身が区別している領域を敢えて関連付けて論じる際して、一般的には詩学最初の著作、と見なされている「火の精神分析」に着目する。なぜならばこの著作には科学哲学から詩学へという転換があるからである。すなわち著者、この著作は、主観的認識を考察する他の科学哲学とは「逆の軸」に位置付けられる。その後、この転換によって、その後の詩学が「火の精神分析」を詩学と見なすようになる。

パシューラルによって、その後の詩学が「火の精神分析」と類似した性質を持つようになり、したがって詩学全体が科学哲学と「逆」という関係をもつことになる。

この「逆」という関係は詩学に三つの影響を及ぼす。第一に、詩学は新しく独創的なイメージを主体とするようになる。第二に、詩学は新しく独創的なイメージを主体とするようになる。第三に、詩学は自然化の影響を受け、詩学の中心的観念となる。それは同時に詩学が科学哲学から受けた大きな影響を反映しているのである。